

発行日 平成27年10月31日  
 発行人 パートナー情報誌  
 「香澄」編集委員会

浅野明宏、尾形孝彦、新聞紀文、  
 廣原毅、有吉潔、上野夏実、  
 戸井昌子、土肥奈津子、  
 坂巻佳織

平成27年  
 秋季号

パートナー情報誌

KASUMI 第5号(通巻43号)

## センター関連の諸行事から

### センター夏まつり2015結果報告

平成27年度霞ヶ浦水質浄化強調月間（7月20日～9月1日）のメイン行事として「発見！体験！霞ヶ浦」をテーマに、県民の皆様が霞ヶ浦をはじめとする湖沼等の水質浄化や環境問題について意識の高揚と実践活動を推進することを目的として、8月29日（土）に霞ヶ浦環境科学センター夏まつり2015を開催いたしました。催事当日は小雨模様の生憎の天気となってしまいましたが、リニューアルした展示室を活用したブースをはじめ、多くの出展者、パートナーの皆様のご協力により、66ブースを設けることができ、県内外から計3,000名の方にご来場いただき、盛況のうちに無事終了することが出来ました。ご協力いただいたパートナーの方々はこの場を借りて感謝申し上げます。（センター 塩原）



ジオラマ模型で学ぼう



さかな対抗大運動会

### 「霞ヶ浦環境科学センター夏まつり2015」に拾う

今年も8月29日（土）に「霞ヶ浦環境科学センター夏まつり2015」が開催されました。多数のお客様が来場され、環境保全団体等による出展・クイズラリー・投網教室などお馴染みのイベントを楽しまれましたが、中でも一際盛況だったのが初出展の「プランクトンフィギュア」のコーナーではなかったかと思えます。午前10時の開始前から多数の親子連れでにぎわい、スタッフは昼食をとるのも交替でやっとの状態でした。ミジンコやミカヅキモ、イカダモなど動・植物プランクトンの形をした2つ割のエポキシ製型材に、80℃のお湯で温められやわらかくなった合成樹脂材を詰め込む、あのタイ焼きに似た作業で仕上げます。プランクトンの形や内臓？の色はもちろん核、ミジンコでは目や触角まで描きます。普段の顕微鏡による観察とは異なった細かい点まで観察でき、身体で憶えることが出来ます。出来上がったプランクトンフィギュアはお土産として持ち帰れるので子供達には大受けでした。是非、今後のイベントの定番にしたいものです。

（センター 丹治、上野、パートナー 浅野）



プランクトンフィギュアの型材



フィギュアを作っているところ

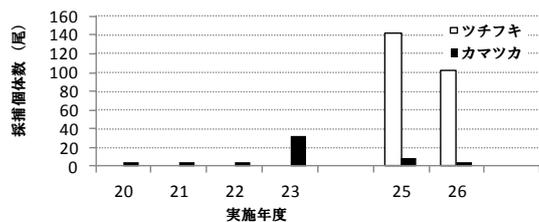
### 定点魚類等調査

小雨にも負けず、風にも負けず、夏の暑さにも・・・定点魚類等調査が実施されてから早くも7年目となりました。担当のパートナーの皆さんにあつては毎月第二土曜日にセンターに参集、四季表情を変貌する霞ヶ浦と体当たりすべく、夏は炎天下の、そして冬は極寒の水面を舞台に採捕・計測の作業を実施し、自然界の一端

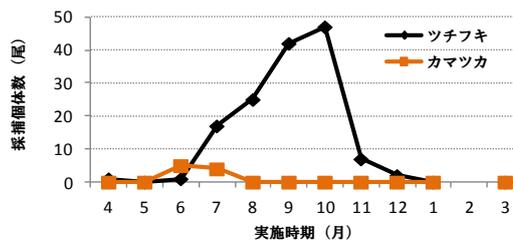
を身をもって体感された、無類のひとつときであったかと推察致します。その間特筆すべき結果がいくつかみられました。最近になってツチフキが採捕されはじめたのです。これはカマツカというしばしば採れるコイ科の魚と容姿が似ています。同種は名の示すように砂地ではなく泥を好むとのこと・・・と。ところで同じハゼ科の魚であって霞ヶ浦を凌駕する2大魚類にヌマチチブとウキゴリがいます。これらの採捕数は実にアンバランスでした。年によって双方の採捕数に明確な違いがみられるのです。甲殻類では涸沼のようにイサザアミは採れませんが、テナガエビとスジエビはエビの代表2種として霞ヶ浦では馴染みのものです。これらは年により採捕数が変動しました。ここ数年では外来魚のブルーギル、ブラックバスはごく稀でした。チャンネルキャットフィッシュもあまりとれません。このようにかつて注視すべきとした一部の限定数地点の調査ではありましたが、明らかに変化が認められています。地点数こそ少なくなりましたが、目下調査は継続中です。



2015年8月8日わくわくキッズで投網実施(センター担当職員:福井正人氏)(左)、ツチフキ(中)、小雨中の調査風景2015年7月4日(右)



カマツカとツチフキの年度別の採捕数の合計  
平成20~25年度までは北池、南池、新地点、弁天宮、沖宿、センター下、川尻の計7地点、26年度からは北池、南池、新地点、弁天宮、B地区の計5地点に



平成25年度魚類等定点調査におけるカマツカおよびツチフキの採捕数の季節変化  
北池、南池、新地点、弁天宮、沖宿、センター下(川尻計7地点)

(パートナー 新聞)

## 平成27年度前期「霞ヶ浦湖岸植物同好会」活動の報告

今年度の課題:第Ⅱ期自然再生事業予定地H区の悉皆調査、B区再生地を重点に全区で絶滅危惧種等の経過観察。

月/日	調査区	植物調査概況 (EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧種、特外:特定外来生物)
4/22	AB	低地でヨシやマコモ、ガマの新葉が輝きカサスゲが開花、法面でオドリコソウやトウダイグサが花を付けた。
	EFGH	ヘビイチゴやアケビが開花。H区でミクリやエゾミソハギが伸び出し、ヤナギトラノオには蕾が付いていた。
	KL	アカメヤナギやアサマスゲ(NT,県EN)が満開。川尻川河口の盛り土で新たなノウルシの生育地を確認。
5/13	AB	ノイバラが満開。ジョウロウスゲ(VU,県NT)やドクゼリが開花。B区に新出種カワヂシャ(NT)が出現。
	EFGH	ヤナギトラノオ(県VU)が満開。E区でツルウメモドキが開花。セイタカヨシ(県NT)が節から葉を出した。
	KL	法面でタンキリマメ(県VU)とノアズキ(県NT)が蔓を立ち上げ、低地ではミズオトギリ(県NT)が茎を出した。
6/10	AB	ドクゼリが花の最盛期を過ぎ実が付き始めた。B区で新出種ホナガカワヂシャやアゼテンツキを発見。
	EFGH	H区国交省の担当者も参加してミクリやヤナギトラノオの群生を確認。新出種ミズハコベが見つかった。
	KL	法面でヤブジラミやアオツツラフジが開花。L区堤脚水路で特定外来生物オオフサモが繁茂し始めた。
7/8	AB	A区でヨシやオギが伸長しヒメガマ、シロネが開花。B区で新出種タタラカンガレイ(県VU)が見つかった。
	EFGH	H区法面で草木が皆伐。低地のミクリ(NT)やシロネは花盛り。特定外来生物のアレチウリが伸びてきた。
	KL	K区のノアズキと川尻川沿いのタンキリマメが開花。堤脚水路のマコモが花穂を出し始めた。

8/12	AB	B区でイガガヤツリなど多種のカヤツリグサが見られ、タコノアシ(NT)が現れた。ミズヒマワリ(特外)が開花。
	EFGH	ハッカやセリの花が満開。ピナンカズラ、シロバナサクラタデが開花、オモトやアケビなどの実ができていた。
	KL	ハス田は一面花盛り。 <b>オグルマ</b> が開花した。ノアズキやタンキリマメに豆果、イヌザクラに液果が付いた。
9/16	AB	B区でアメリカキンゴジカとハチジョウススキを初確認。水際に待望の <b>カンエンガヤツリ</b> (県 NT)が出現。
	EFGH	低地でヒガンバナが満開。アレチウリ(特外)の実ができ始めた。オニグルミやアケビなどの実は成熟間近。
	KL	アキノレ、ヌルデの木に花と若い実があった。コムラサキの実が美しい。休耕田でミズアオイ(NT)が開花。



4月K区 **アサマスゲ** (カヤツリグサ科) 国準絶滅、県絶滅危惧IB類。多年草。  
 5月H区 **ヤナギトラノオ** (サクラソウ科) 県絶滅危惧II類。多年生寒地植物。  
 6月A区 **ドクゼリ** (セリ科) 日本三大毒草。全草猛毒。多年草。



7月H区 **ミクリ** (ミクリ科) 多年草。準絶滅危惧種。果実がクリの実に似る。  
 8月K区 **オグルマ** (キク科) 多年草。周囲の舌状花がきれいに並び小車状。  
 9月B区 **カンエンガヤツリ** (1年草) 国絶滅危惧II類。大型のカヤツリグサ。

(同好会代表 パートナー 有吉)

## 紀行文

### 「私の細道」(その15) ゆぎょうやなぎ 遊行柳

「人は朽木の柳の精」で有名な謡曲「遊行柳」は室町後期の観世信光作で、広く親しまれている演目である。時宗の遊行上人が翁に姿を変えた柳の精に十念を授け成仏させるというあらすじであるが、柳はかつて西行が歌に詠んだ老木であると紹介される。作品の素材として、新古今集262に掲載されている

道のべにしみづ流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ 西行



が引用されている。西行が本当に奥州下りの折に詠んだ歌か否かについては疑念があるようだが、後年このようないきさつで、芦野の「遊行柳」は歌枕として知られるようになった。

江戸期の芭蕉の時代、芦野の領主であった那須衆蘆野民部資俊(すけとし)の江戸下屋敷は深川本番所橋(万年橋)の側にあり、芭蕉庵とはすぐ近くであった。この縁であろうか、資俊は芭蕉の弟子となり、俳号を「桃酔」といった。「おくのほそ道」の「遊行柳」の章段に登場する「郡守戸部(こほう)某」とはこの資俊のことである。この旅の前に「この柳見せばや」と言われていた

芭蕉は、西行ゆかりの地としての思いを込めて期待したに違いない。芦野の茶屋市兵衛の案内で、この遊行柳に立ち寄っている。時は元禄2年(1689)4月20日、陽暦にすると6月7日。ちょうど田植えの時期であり、柳と共に早乙女の姿を見ながらであろうか、有名な一句を残している。

田一枚植て立去る柳かな 芭蕉

この句、芭蕉の西行の歌への想いも込められていると解釈されると共に、この句に詠まれる田を植えたのは誰か、立ち去ったのは誰かと議論的にもなっている。早乙女なのか、芭蕉なのか、柳の精なのか、植えた者と立ち去った者は同一か、異なるのかなど、いろいろ取り沙汰されている。誰であるかに依って、様々な解釈が成り立ち、この句の意味や趣が異なる。嵐山光三郎氏は、早乙女の田植えを見ている内に、柳の精霊が田を一枚植えて立ち去ったという芭蕉の幻視であるとしている。

平成26年10月29日、3時頃、那須湯本を発った私は、那須岳中腹から一気に下り、一軒茶屋を経て、漆塚から芦野に入った。目指すは遊行柳と、観光客にも聞いたが見出せず、街中を車でうろろしているうちに、交差点で後続にパトカーが付いた。丁度良いと、そのパトカーを止めて遊行柳の場所を問うと、親切にもその場所まで先導してくれた。芦野のおまわりさんはやさしい。刈田の中に2本の柳があり、その内1本が遊行柳である。樹齢は40年位。近づくと、3名の役場の所員が来ていた。最近、テレビに出て観光客が多いとの事。先程街中で道を聞いた観光客の仲間5~6人も加わり、みんなでしばし談笑。埼玉県鴻巣から芦野温泉に来たという。芭蕉句碑の反対側に上記した西行の歌碑と、蕪村の句碑が並んでいる。芭蕉は西行を慕い、蕪村は芭蕉に惹かれて、此の地を訪れたという。

神無月はじめの頃ほひ下野の国に執行して、遊行柳とかいへる古木の影に目前の景色を申し出ではべる

柳ちり清水かれ石ところどころ 蕪村

季節も異なり、蕪村の遊行柳に対する捉え方が芭蕉とは異質であることがわかる。私が訪れたのは、芭蕉よりこの蕪村の句に近い季節であった。ただ、柳の青さは残っていた。遊行柳の奥に山があり、その麓に神社がある。むしろその神社の前に柳があると云った方が良いのかもしれない。「上の宮温泉神社」とその裏山は「鏡山」。鏡餅に似ている。まさに、この地は能の舞台の様相である。曾良随行日記によると、芭蕉ら一行は、この後、芦野にある連歌師兼載(けんさい)の庵跡を訪れているが、そして、いよいよ一路、白河の関へと向かうこととなる。(パートナー 小松)

◆平成27年度の新規登録 新パートナーのご紹介◆ (新たに力強い人材の賛同がありました)

梅田光俊(うめだみつとし) パートナー、 會田真聖(あいだまさきよ) パートナー

編集後記 最近の話題から...あれこれ

2015年日本人の方々が昨年の快挙に引き続き、またまたノーベル賞に輝きました。私たちの直面するこの霞ヶ浦の環境諸問題に対し、こうした科学の成果が還元されることを大いに期待したいものです…。さて、いよいよ食欲の秋の到来。美味しそうな天そばですね(左の麺の写真)。この天ぶらの具材は何でしょう? 美味な魚とされかつて移入・養殖されてきましたね…。しかし惜しくも今や霞ヶ浦の厄介者になってしまったあの魚です。夏の湖畔の美浦の食堂にて(霞ヶ浦の食材/味答えは次号に)。



本年ラムサール条約

に登録された酒沼にて早速センターの自然観察会が実施されました(写真右)。その折豊富な生物を目にしました。沢山のモクスガニや、希少なウナギもとれ、ハゼ釣りも体験しました。トップのタイトル脇にある写真はお馴染みのくま君(ハロウィン/神谷さん作)、そして右下図柄は、パートナーの高崎正氏の代表作、切り絵で表現したセンター全景をあしらった活動10周年メッセージになります。

(パートナー 新関)

